

【改訂版】今、成約聖徒が受けている「言語に絶するほどの内的な試練」とは？

この時代においては、文芸復興の主導理念である人文主義と、これに続いて起こる啓蒙思想、そして、宗教改革によって叫ばれるようになった、信仰の自由などによる影響のために、宗教と思想に一大混乱をきたすようになり、キリスト教信徒たちは、言語に絶するほどの内的な試練を受けるようになるのである。（『原理講論』p483）

上記のみ言の冒頭にある「この時代」とは、摂理的同時性の時代のうち「メシヤ再降臨準備時代」のことを意味しています。

この時代にキリスト教徒たちは厳しい内的な試練を受けたのですが、今まさに成約聖徒たちもそれと同様、あるいはそれ以上の「内的な試練」を受けています。

今回は、成約聖徒が受ける「内的な試練」とはどのようなもので、サタン勢力はどのようにして試練してくるのかについて深掘りしてみたいと思います。

※この記事は、2019年11月、本ブログに連載した記事を加筆・修正し、再編集したものです。

## 第1章 成約聖徒たちが受ける「内的な試練」の時期とその内容

### (1) 成約聖徒が受ける「内的な試練」について

#### ①「内的な試練」はいつから始まる？

新約時代のキリスト教徒たちが「言語に絶するほどの内的な試練」を受けたのは「メシヤ再降臨準備時代」です。

「メシヤ再降臨準備時代」は、1517年のルターの宗教改革から、第1次世界大戦が終った1918年までの400年期間です。

「成約時代の摂理的同時性」では、「メシヤ再降臨準備時代」を蕩滅復帰する期間を2018年9月から2022年8月までの4年期間としています。

ですから、成約聖徒たちが受ける「言語に絶するほどの内的な試練」は、2018年9月から始まっていることとなります。

#### ②「内的な試練」が顕著になるのは2020年1月から

「統一原理」では、「メシヤ再降臨準備時代」を宗教改革期、宗教および思想の闘争期、政治と経済および思想の成熟期の三期間に区分しています。

この三つの期間のなかでも、キリスト教徒たちの試練が特に顕著になってきたのが

宗教および思想の闘争期です。

宗教および思想の闘争期について『原理講論』には次のように記述されています。

この期間は、西暦一六四八年ウェストファリア条約によって新教運動が成功して以後、一七八九年フランス革命が起こるまでの一四〇年期間をいう。文芸復興と宗教改革によって人間本性の内外両面の欲望を追求する道を開拓するようになった近世の人々は、信教と思想の自由から起こる神学および教理の分裂と、哲学の戦いを免れることができなくなっていた。(『原理講論』p519)

「成約時代の摂理的同時性」から見たとき、この宗教および思想の闘争期と同時性の期間になるのが2020年1月から2021年4月までの16ヵ月間になります。

成約時代においても、2020年1月以降、「内的な試練」と考えられる現象が顕著に見られるようになります。

それでは次に、この時代にいる成約聖徒たちが、どのような「内的な試練」を受けるのかについて考えてみましょう。

(2)「内的な試練」とはどのような試練なのか？

①成約聖徒たちが受ける「内的な試練」

「メシヤ再降臨準備時代」にキリスト教徒たちが受けた試練とは、次のようなものでした。

復帰摂理時代は、律法と祭典などの外的な条件をもって、神に対する信仰を立ててきた時代であったので、メシヤ降臨準備時代における第一イスラエルは、ペルシャ、ギリシャ、エジプト、シリア、ローマなどの異邦の属国とされて、外的な苦難の道を歩まなければならなかった。

しかし、復帰摂理延長時代はイエスのみ言を中心として、祈りと信仰の内的条件をもって、神に対する信仰を立ててきた時代であるがゆえに、メシヤ再降臨準備時代における第二イスラエルは、内的な受難の道を歩まなければならないのである。(『原理講論』p483)

このように、旧約時代のイスラエル民族は外的な苦難の路程を歩んだのですが、新約時代はみ言と信仰に対する内的な受難の道をキリスト教徒たちは歩みました。

文鮮明先生のみ言に「**み言の目的は実体であり、実体の目的は心情である**」(み言の道「**心情**」)とあることから、成約時代は、実体と心情の条件をもって神様に対する信仰を立てる時代です。

ですから、成約聖徒たちは、み言と信仰の試練と同時に、さらに内的な実体と心情

の試練も受けるようになると考えられます。

## ②実体と心情の試練とは？

まず実体の試練とは何かというと、主に衣食住など日常生活の経済的な問題や健康問題に関連する苦難です。

例として、「メシヤ再降臨準備時代」のキリスト教徒たちが経済問題に苦しみ、そこから信仰を失っていったことが書かれている箇所を『原理講論』から引用します。

初代教会の愛が消え、資本主義の財欲の嵐が、全ヨーロッパのキリスト教社会を吹き荒らし、飢餓に苦しむ数多くの庶民たちが貧民窟から泣き叫ぶとき、彼らに対する救いの喊声は、天からではなく地から聞こえてきたのであった。これがすなわち共産主義である。神の愛を叫びつつ出発したキリスト教が、その叫び声のみを残して初代教会の残骸と化してしまったとき、このように無慈悲な世界に神のいるはずがあろうかと、反旗を翻す者たちが現われたとしても無理からぬことである。(『原理講論』p27)

これを蕩滅復帰する路程を歩んでいる成約聖徒たちは、経済問題や健康問題において、これ以上の苦難の道を歩まざるを得ない立場にいると言えます。

現在も続いている中共武漢ウイルスによる「新型コロナ騒動」は、2020年1月から始まりましたが、摂理的に見るとき、まさに成約聖徒たちが受けるべき実体の試練です。

次に、心情の試練とは何かというと、エバが天使から誘惑されたとき、感情的に混沌となってしまった立場と同じ立場に立つようになることです。

このときのエバは、アダムから聞いた神様の戒めのみ言と、天使長が語る誘惑の言葉との間に立ち、どちらを信じるべきか判断に迷っていました。

ですから、今の時代の成約聖徒たちは、どこに神様の摂理の中心があり、何を信じてよいのか、誰を信じてよいのか全く分からなくなるという試練を受けるようになります。

それでは、サタン勢力が具体的にどのような方法で試練してくるのか、それを見抜く方法について考えてみましょう。

## 第2章 サタンおよびその勢力の戦略戦術

### (1) サタンおよびその勢力の戦略戦術を見抜くために

墮落した人間にとって、神様の業とサタンの業を見分けることはとても難しく、『原理講論』には次のように書かれています。

墮落人間は、神もサタンも、共に対応することのできる中間位置にあるので、善神が活動する環境においても、悪神の業を兼ねて行うときがある。また悪神の業も、ある期間を経過すれば、善神の業を兼ねて行うときがときたまあるから、原理を知らない立場においては、これを見分けることは難しい。(『原理講論』p120)

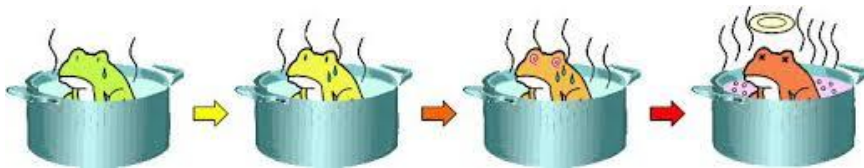
「統一原理」を完全には理解できていない私たちが、サタンおよびその勢力の戦略戦術を知り、かつそれを見抜くことは相当に困難と言えます。

それを少しでも補うため、参考として「ゆでガエル理論」と「プロスペクト理論」、そして「サラミ戦術」の考え方をご紹介します。

### ①「ゆでガエル理論」

「ゆでガエル理論」は、「ゆでガエル症候群」や「ゆでガエルの法則」とも呼ばれ、企業経営やビジネスの教訓としてよく用いられる寓話です。

その内容は、カエルを常温の水に入れて少しずつ熱していくと、カエルは温度変化に慣れてしまい、そのままゆであがって死んでしまうというものです。



もし急激に温度が上がれば、カエルは驚いて飛び出すはずですが、温度が上がる速度があまりに遅いと、それに気付かないということですね。

実際には、ゆっくり温度が上昇しても、熱さが限界にすればカエルは外に飛び出すので、科学的な根拠のある話とは言えないでしょう。

しかし、人間の心理や行動の本質をよくついていますし、私たちの経験から考えても説得力のある内容です。

例えば、業績の悪化が続いている状況なのに、過去のやり方に縛られて改革に着手できない経営者や、その間違いを知りながら、保身のためにそれを指摘できない部下などは、ゆでガエル状態の典型例と言えます。

こういったことはビジネスの世界だけに限らず、日常の人間関係でもよく見られることです。

成果が出ないまま間違った方向に進んでいるのに、どうしてそのやり方を改善できないのか、それを行動心理学的に説明しているのが次の「プロスペクト理論」です。

## ②「プロスペクト理論」

「プロスペクト理論」とは、投資やギャンブルで大損してしまう原因を説明するときによく使われる行動心理学の理論です。

簡単に言うと、「人は、利益はすぐにでも手に入れようとするが、損失はすぐには確定できない性質をもっている」ということです。

損失を確定するという事は、言い換えると、自分の過ちや失敗を認めることとも言えます。

ですから、人間というのは、自分の間違いを簡単には認めたくないという性質をもっていることとなります。

それと同時に、自分の判断は正しかったと思いたいという欲求もあるので、それを裏付ける情報しか目に入らなくなるという傾向があります。

さきほど説明した、「ゆでガエル状態」になっているにもかかわらず、そこから脱け出せない心理的な理由はここにあるわけです。

そして、このような人間の心理を利用しているのが「サラミ戦術(サラミ・スライス戦略)」です。

## ③「サラミ戦術(サラミ・スライス戦略)」

「サラミ戦術(サラミ・スライス戦略)」とは、懐柔などによって敵対する勢力を少しずつ滅ぼしていく手法のことです。

敵対勢力ではなくても、外交交渉などでは、議題や措置を少しずつ出して、交渉相手から対価獲得や時間稼ぎを行うことがあり、これも「サラミ戦術」と言えます。

ビジネスの世界でもこの手法が使われていて、自動車が定期的にモデルチェンジしたり、ソフトウェアが随時更新されたりするのがその例です。

このようにすると、開発途上の商品でも販売できますし、継続して使用してもらうことで固定客化させることが容易になります。

「プロスペクト理論」で説明したように、長く使えば使うほど、ユーザーは自分の判断が間違っていないという思いが強くなります。

ですから、その商品がすでに自分のニーズに合わなくなっているにもかかわらず、なかなか他の商品に切り替えづらくなってしまいます。

サタン及びその勢力は、このような人間の心理を利用し、少しずつ、段階的に浸透、

侵入する戦略戦術を取ります。

いきなり大きな変化が起きると、自分たちの正体と目的がすぐに見抜かれてしまうからです。

このようにサタン勢力は、成約聖徒たちに気付かれないよう、唯一絶対なる神様に対する信仰を少しずつ、段階的にずらしながら悪の方向に誘導しようとしてきます。

## (2) 神様、再臨主、「統一原理」を否定しようとするサタン

サタンおよびその勢力は、神様の存在、文鮮明先生が再臨主であること、「統一原理」が真理であることに対して疑心を抱かせ、その絶対的な価値を相対化させようとしてきます。

つまり、この世の神観や人物、思想の情報を示しながら、唯一絶対の神様を神々の中の一人の神にすぎない、文鮮明先生を偉人の中の一人にすぎない、「統一原理」を数多くある教義や思想の一つにすぎないと考えるように誘導するのです。

例えば、エデンの園で天使長ルーシェルは、エバに対して次のように言いながら神様のみ言を否定し、神様の戒めのみ言に対するエバの絶対信仰を試練してきました。

あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです。(創世記 3 章 4 ~5 節)

これと同じように、現代の成約聖徒たちに対しても、サタンは神様、再臨主、「統一原理」の絶対価値を相対化させ、その信仰を試練してきます。

### ① 唯一絶対なる神様を否定

サタン及びその勢力の究極的な目的は、唯一絶対なる神様に対する私たちの信仰を失わせ、神様は存在しないと思わせることにあります。

『原理講論』には、自己否定できないはずのサタンが、その目的を果たすため、自分をも犠牲にして神様を否定しようとしたことが次のように記述されています。

サタンは歴史の終末をよく知っているので自分が滅亡することもよく知っている。したがって、結局はサタン自身も尊ばれないときが必ずくることを想定していながら、自分の犠牲を覚悟して神を否定したのがすなわち弁証法的唯物論なのである。(『原理講論』p554)

このように、サタンは総力を挙げ、それこそ命懸けで神様を否定し、弁証法的唯物論を中心に無神論の世界をつくらうとしてきました。

しかし、ソ連を中心とする共産主義国の崩壊により、弁証法的唯物論による無神論世界の構築は一度失敗に終わったのです。

そして、東西の冷戦体制が神側の勝利で終結したのち、1994年5月、韓国では「世界基督教統一神霊協会」が「世界平和統一家庭連合」へと名称変更が行われました。

それと同時に『私の誓い』が『家庭盟誓』に代わったのですが、これは神様の復帰摂理が個人救援の時代から家庭救援の時代になったことを意味しています。

そこでサタンは、家庭救援の摂理を妨害するため、国家体制を共産主義化する戦略から、家庭破壊を第一目的とする文化共産主義を浸透させる戦略へと切り替えたのです。

そして、ひとり一人の信仰に対しても、最初から無神論者にしようとするのではなく、まず一神教的(一元論的)な信仰から多神教的(善悪二元論的)な信仰に移行させる戦略に変えました。

「ゆでガエル理論」や「サラミ戦術」のように、多神教的な信仰にすることで、サタンが正体を見抜かれることなく、その中の一人の神として潜入できる余地が生じます。

そうして多神教の中に紛れ込み、そこで勢力を拡大して唯一絶対なる神様を相対化させ、自分が創造主の立場に立って人間世界を支配しようとしているのです。

『原理講論』の「総序」に「欲望が概して善よりは悪の方に傾きやすい生活環境の中に、我々は生きている」(p21)とあります。

これは、私たちが暮らしている生活環境そのものが、サタンを中心とする唯物的かつ相対的な価値観とその目的を果たすための環境になっているということです。

## ②「統一原理」の墮落論を批判し、原罪とメシヤの必要性を否定

サタンは自分の存在を犠牲にしたとしても、自分の罪状は絶対に知られたくないため、「統一原理」の墮落論を徹底して否定してきます。

宗教界は天使界の立場になりますが、原罪を教理として定めているのはキリスト教だけです。

イエス様は「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」(ヨハネ福音書3章3節)と語られ、復帰摂理歴史で初めて原罪清算の必要性を明らかにされました。

それまでは、だれ一人としてあらゆる罪惡の根である原罪を認識できず、清算することもできなかったのです。

すべての罪は、その根に該当する原罪から生ずる。それゆえに、原罪を清算しない限りは、他の罪を根本的に清算することはできない。しかしながら、隠されているこの罪の根はいかなる人間も知ることができないもので、ただ人間の根として、また、真の父母として降臨されるイエスのみがこれを知り、清算することができるのである。(『原理講論』p121)

このように、生まれながらにして原罪をもっている墮落人間が原罪を認識することは不可能であり、無原罪のメシヤでなければそれを認識することはできません。

原罪は人類の過去の過ちとも言えますが、「プロスペクト理論」にあるように、墮落した人間は自分の罪や間違い、失敗を簡単に認めようとしないう性質をもっています。

もし原罪をもって生まれたことを認めなければ、それを贖うために降臨されるメシヤの必要性も感じないのです。

ですから、サタンおよびその勢力は、人間の墮落が不倫なる性関係によって起きたとする墮落論を必死に否定してきます。

原罪さえ否定してしまえば、それを清算するために降臨されるメシヤを待ち望むことも、受け入れることもなくなるからです。

2000年前にサタンは、自分が支配する人類を失ってもメシヤであるイエス様を葬ろうとしたことが『原理講論』に記述されています。

サタンは、自分の側に立つようになった選民をはじめとする全人類を、たとえ、みな神に引き渡すようになったとしても、メシヤであるイエスだけは殺そうとしたのである。その理由は、神の四〇〇〇年復帰摂理の第一目的が、メシヤ一人を立てようとするところにあったので、サタンはそのメシヤを殺すことによって、神の全摂理の目的を破綻に導くことができると考えたからである。(『原理講論』p422)

サタンおよびその勢力が「統一原理」の墮落論を否定し、原罪を否定する目的は、再臨のメシヤの必要性を否定し、神様の復帰摂理を破綻させることにあるのです。

### ③み言と実体の不一致を批判し「統一原理」を否定

私たちは、神様のみ言と現実が一致していないときに信仰が揺らぐ傾向があります。

一般的にも、言行の不一致は批判されますし、信頼を損なう主な要因になり得ることです。

ですから、み言と実体が一致していない教会組織や聖徒たちの姿があるとき、サタンおよびその勢力は、その点を集中して批判してきます。



その次の段階になると、現実の実体の方を肯定し、み言と一致していない実体に対して「人間ならみなそうだ。不足だから人間だ」と言いながら、み言の方が間違っていると考えるように誘導します。

これもまた「プロスペクト理論」にある、自分の間違いや失敗を認めたくない墮落人間の心理を利用した戦術です。

しかし、『新約聖書』の「ローマ人への手紙」(口語訳)の7章を見ると、パウロの嘆きが次のように記録されています。

わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいるが、わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。(ロマ7章22～24節)(注)

#### ※注

キリスト教では、このパウロの言葉について、彼がキリスト教の信仰をもつ以前のことなのか以後のことなのか意見が分かれています。

「七章後半のパウロの告白的体験は、彼の回心前の出来事かそれとも回心後の経験か、学者たちの意見は大きく二つに分かれている。ブルトマン、キュンメル等は回心以前の出来事であると考え、バルト、ニグレン等は回心後の経験であると主張している。」『新聖書註解』(いのちのことば社)

「統一原理」では、霊的救いの限界という観点から、キリスト教信仰をもったあとのキリスト者の姿ととらえています。

このようにパウロは、自分自身の矛盾した状態に気付いていましたが、大概の人は自分の矛盾を認識できない、あるいは認めようとしないことが多いのです。

このような墮落人間に対してサタンは、信仰生活と日常生活を分断し、信仰生活を形式化させつつ、日常生活では唯物論的価値観を中心に行動させるように誘導するのです。

### 第3章 イエス様の12弟子に見る正しい神観と信仰観をもつための教訓

最初に、ユダヤ教からキリスト教へと伝統的に継承されてきた一神教の信仰を確認してみましょう。

#### (1) 復帰摂理歴史に見る神観の変遷

##### ① 旧約時代の神観-唯一絶対の神様

旧約聖書の中心である「十戒」の第一と第二の戒律は、主が唯一の神であり、他の

ものを神としてはならず、偶像を崇拝してはいけなくなっています。

あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。(出エジプト 20 章 3~5 節)

当時の宗教は多神教が主流で、唯一絶対の神様以外のものも神として祀られ、そこにサタンが入り込む余地が充分にありました。

そのため、神様はモーセに十戒を与え、その中で主なる唯一の神以外は崇拝してはいけないと語られたのです。

## ②新約時代の神観-父なる神様

イエス様は、「あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである」(マタイ福音書 6 章 8 節)と語られ、神様が人間の父であることを明らかにされました。

旧約時代の唯一絶対の神様に対する信仰の基台の上に、新約時代は「父なる神」を信奉してきました。

イエス様は、この「父なる神」のひとり子ですから、「わたしを見た者は、父を見たのである」(ヨハネ福音書 14 章 9 節)と語られました。

そして、「人の子は父の栄光のうちに、御使たちを従えて来る」(マタイ福音書 16 章 27 節)と語って再臨することを約束されたのですが、サタンが偽キリストとして侵入してくる可能性がありました。

そのためイエス様は、神様が十戒を通して唯一絶対の神だけに仕えよと言われたように、「人の子が天の雲に乗って来る」(マタイ福音書 24 章 30 節)と語られて、聖徒たちが天だけを仰ぎ見るようにされたのです。

## ③成約時代の神観-心情の神様

文鮮明先生は、唯一絶対の父なる神様が心情の神様であることを明らかにされ、成約時代の新しい真理として「統一原理」を解明されました。

この「統一原理」は、蘇生段階の旧約時代を経て、長成段階の新約時代の信仰に到達した人たちが受ける完成段階の神様の真理のみ言です。

そのため、唯一絶対の神様が存在し、その神様と人間は父子関係である、ということが前提になっています。

そして、神様とはどのような方で、私たち人間とはどのような関係にあり、その心情と事情とはどのようなものなのかを教えてくれるのが「統一原理」です。

私たちが「統一原理」を実践することによって、日常の生活を通して神様の心情と事情を知り、体恤できるようになっています。

また、『原理講論』のp31には「人間が、根本的に、神を離れては生きられないようにつくられているとすれば、神に対する無知は、人生をどれだけ悲惨な道に追いやることになるであろうか」とあります。

「統一原理」が父なる神様の心情と事情を教えてくれるのは、私たちが真の幸福に至るためです。

それでは、次に、イエス様の十二弟子の一人、ピリポを通して信仰の教訓を学んでみましょう。

## (2) イエス様の十二弟子ピリポに見る信仰の教訓

### ①ピリポについて

ピリポは、新約聖書に登場するイエス様の十二弟子の一人で、弟子たちの中で食材の調達を任されていた人物です。

彼はイエス様が直接伝道された弟子の一人でもあり、そのことがヨハネ福音書に記録されているので紹介します。

そしてシモンをイエスのもとにつれてきた。イエスは彼に目をとめて言われた、「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケパ(訳せば、ペテロ)と呼ぶことにする」。その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされたが、ピリポに出会って言われた、「わたしに従ってきなさい」。(ヨハネ福音書 1 章 42～3 節)

このように、ペテロが伝道されたその翌日に伝道されているので、十二弟子の中で最も古い弟子の一人ということになります。

また、イエス様の「わたしに従ってきなさい」というたった一言のみ言に素直に従っていることから、その人柄をうかがい知ることができます。

そして、彼は十二弟子のひとりナタナエル(バルトロマイ)を伝道していますが、このときの様子も、彼の人柄をよく表しているといえます。

このピリポがナタナエルに出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った」。ナタナエルは彼に言った、「ナザレから、なんのよいものが出ようか」。ピリポは彼に言った、「きて見なさい」。(ヨハネ福音書 1 章 45～6 節)

ナタナエルからイエス様を否定されたとき、彼は反論や口論などはせず、自分の目で直接見て確かめてみるようにすすめています。

これらのエピソードから、ピリポという人物は、とても素直で人柄がよく、争いごとは好まない性格だったようです。

イエス様がなくなったあとのピリポの伝道活動はすばらしく、病人を癒すなどして大きな実績を挙げています。

最後は異教徒たちに捕らえられ、二人の娘とともに十字架にかけられ、87歳で殉教したといわれています。

## ②エピソード I -パンと魚の奇跡

ヨハネ福音書には、さきほど紹介したピリポがイエス様から伝道された場面の他に、イエス様とピリポのやりとりが3ヶ所記録されています。

その中の一つが、イエス様が5000人の人々に食物を与えようと、食材調達の担当だったピリポに話しかける場面です。

イエスは目をあげ、大ぜいの群衆が自分の方に集まって来るのを見て、ピリポに言われた、「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」。これはピリポをためそうとして言われたのであって、ご自分ではしようとするのを、よくご承知であった。すると、ピリポはイエスに答えた、「二百デナリのパンがあっても、めいめいが少しずついただくにも足りませんまい」。(ヨハネ福音書6章5～7節)

マタイ福音書の20章2節に「彼は労働者たちと、一日一デナリの約束をして、彼らをぶどう園に送った」とあるので、当時の1デナリは労働者の平均日給だったようです。

イエス様の問いかけにピリポは、「200日分の労働賃金で買えるパンがあっても、5000人を満足させるには足りません」と答えていることになります。

食材調達を任されていたピリポだったので、この返答はかなり適切で現実的なものではありませんでした。

しかし、聖句にあるように、この問いかけは、イエス様のピリポに対する「試み」でした。

このイエス様のピリポに対する「試み」とは、一般的な解釈では、ピリポの信仰心や真理の理解度を試したのであり、何が人を生かすのかを教えたかったということになっています。

ここで想起されるのは、イエス様が荒野でサタンから三大試練を受けたときのことで

す。

その第一の試練に対してイエス様は、『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてある(マタイ福音書4章4節)と答えて、その試練を退けられました。

そして、マタイ福音書には、み言とパンに対してイエス様がどのような価値観をもっていらっしやっただのかが推察できる聖句があります。

だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。(マタイ福音書6章31～3節)

このことから、イエス様のピリポに対する「試み」とは、み言とパンのどちらに価値をおき、どちらを優先するのか、というものだと考えることができます。

もしこのときにピリポが、「主よ、パンのことは心配なさらず、彼らにみ言をください。そうすれば彼らは満たされるでしょう」というような返答をするべきだったのかもしれませんが。

実際には、とても素直だったピリポは、「二百デナリのパンがあっても、めいめいが少しずついただくにも足りません」と言ってとても現実的な返答をしています。

このような、イエス様のピリポに対する「試み」やイエス様の三大試練から、み言とパンは、それぞれ信仰生活と衣食住の日常生活を象徴していると考えこともできます。

これは、サタンが経済問題で苦しむ人に対して、み言や信仰よりも現実の生活問題の解決を優先するよう誘惑してくることを意味しています。

ピリポは食材調達の担当ですから、ある程度、お金も動かせる立場にいたため、イエス様は、サタンの誘惑を退けられるよう、このような「試み」をされたのではないのでしょうか。

### ③エピソードⅡ-最後の晩餐にて

もう一つのエピソードは、冒頭で紹介した『原理講論』のみ言にある、ピリポがイエス様に「神様を見せてください」と言った話です。

ピリポはイエスに言った、「主よ、わたしたちに父を示して下さい。そうして下されば、わたしたちは満足します」。イエスは彼に言われた、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか。わたしが父におり、父

がわたしにおられることをあなたは信じないのか。わたしがあなたがたに話している言葉は、自分から話しているのではない。父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである。(ヨハネ福音書 14 章 8～10 節)

この出来事は、最後の晩餐のときのことで、イエス様が十字架上で亡くなられる前日のことです。

ここでイエス様は「こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか」と語られています。

さきほど説明したように、ピリポはペテロが伝道された翌日にイエス様と出会っているので、弟子の中では最も長くイエス様と一緒にいた一人です。

そのピリポから「神様を見せてください」と言われたのですから、イエス様は相当な衝撃を受けられたのではないかと思います。

イエス様としては、「それではなぜ今まで私についてきたのか」という思いだったのではないのでしょうか。

このときのイエス様の心情について、文鮮明先生は祈りの中でこのように祈られています。

ここで(ヨハネ福音書 14 章 5 節)でトマスは「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません」と言い、ヨハネ福音書 14 章 8 節でピリポは「父を示して下さい」と言いました。このように「父を示して下さい」と求める弟子たちを見ると、イエス様の悲しみがどれほど大きかったかということを、ここにいる群れたちが共に感じるようにしてください。(『文鮮明先生御言選集』5-137 1959.1.11)

このようなピリポの中に、目に見えない神様や真理よりも、実体の人間に従いやすい私たちの信仰課題が重なって見えます。

最後の晩餐でのこのエピソードから、今の私たちの信仰姿勢をもう一度見直して見る必要があります。

### (3) 天が望む「正しい信仰」とは？

『新約聖書』の「ヘブル人への手紙」には、信仰とは何かについて次のような聖句があります。

信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである。昔の人たちは、この信仰のゆえに賞賛された。信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉で造られたのであり、したがって、見えるものは現れているものから出てきたのでないことを、悟るのである。(ヘブル書 11 章 1～3 節)

このように、見ていない事実を確認するのが「信仰」ですが、もし見て、はじめて信じるのであれば、それは「信仰」ではなく、通常の「確認」と言ったほうがいいかもしれません。

このような「正しい信仰」をもつにはどうすればよいのか、『原理講論』には次のように記述されています。

我々が正しい信仰をもつためには、第一に祈祷により、神霊によって、神と直接霊交すべきであり、その次には、聖書を正しく読むことによって、真理を悟らなければならない。イエスが神霊と真理で礼拝せよ(ヨハネ四・24)と言われた理由はここにある。(『原理講論』p191)

まず祈りと通して神様と霊的に交流し、その基台の上でみ言を正しく読むこと、これが正しい信仰をもつために必要なこととなります。

また、『原理講論』には、「正しい信仰」をもつことの妨げになるものについても、次のように指摘されています。

我々は、因習的な信仰観念と旧態を脱けられないかたくなな信仰態度を、断固として捨てなければならないことを、この洗礼ヨハネの問題を通じて教えられる。使命を果たして行った洗礼ヨハネを、使命を果たさなかったと信じることも不当であるが、事実上、使命を果たさなかった洗礼ヨハネを、よくも知らずに、全部果たしたと信じることも正しい信仰ではない。我々は神霊面においても、真理面においても、常に正しい信仰をもつために努力しなければならない。(『原理講論』p205)

そして、文鮮明先生は、信仰とは神様と私との関係性の中で成立するものであることを次のように語られています。

「信仰」というものは信じて仰ぎみることです。「信用」というのは人間社会で使われる言葉ですが、「信仰」というのは人間と天の間で成立するものなので、信じて仰ぎみるということです。(『文鮮明先生御言選集』60-260 1972.8.18)

信仰の道におけるその(信仰の)対象は、私ではなく神様です。どこまでも神様を(信仰の)対象にしていく道です。言い換えれば、主体と対象の関係が神様と私の中に結ばれ、主体から成される事実が対象に及び、対象から成される事実が主体と関係を結ばなければならないということです。(『文鮮明先生御言選集』40-273 1971.2.7)

サタンとその勢力の狙いは、神様と私の関係を断ち切ることにあるので、日常生活で神様と一問一答しながら、常に神様の立場に立って見つめ、考え、行動できるように努力しましょう。

## 第4章 中心人物たちの信仰と「内的な試練」克服の第一歩

### (1) 神様の召命を受けた中心人物たちの信仰

#### ① 旧約時代の中心人物たちの信仰

「ヘブル人への手紙」の 11 章には、復帰摂理歴史(旧約時代)の中で、神様の召命を受けた中心人物たちの信仰が次のように紹介されています。

##### 【アベル】

信仰によって、アベルはカインよりもまさったいけにえを神にささげ、信仰によって義なる者と認められた。神が、彼の供え物をよしとされたからである。彼は死んだが、信仰によって今もなお語っている。(ヘブル書 11 章 4 節)

##### 【ノア】

信仰によって、ノアはまだ見ていない事らについて御告げを受け、恐れかしこみつつ、その家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世の罪をさばき、そして、信仰による義を受け継ぐ者となった。(ヘブル書 11 章 7 節)

##### 【アブラハム】

信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った。信仰によって、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。(ヘブル書 11 章 8～9 節)

信仰によって、サラもまた、年老いていたが、種を宿す力を与えられた。約束をなされたかたは真実であると、信じていたからである。(ヘブル書 11 章 11 節)

信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。この子については、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」と言われていたのであった。彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、イサクを生きかえして渡されたわけである。(ヘブル書 11 章 17～19 節)

##### 【イサク】

信仰によって、イサクは、きたるべきことについて、ヤコブとエサウとを祝福した。(ヘブル書 11 章 20 節)

##### 【ヤコブ】

信仰によって、ヤコブは死のまぎわに、ヨセフの子らをひとりひとり祝福し、そしてそのつえのかしらによりかかって礼拝した。(ヘブル書 11 章 21 節)

##### 【ヨセフ】

信仰によって、ヨセフはその臨終に、イスラエルの子らの出て行くことを思い、自分



の骨のことについてさしずした。(ヘブル書 11 章 22 節)

### 【モーセ】

信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見えていたからである。信仰によって、彼は王の憤りをも恐れず、エジプトを立ち去った。彼は、見えないかたを見ているようにして、忍びとおした。信仰によって、滅ぼす者が、長子らに手を下すことのないように、彼は過越を行い血を塗った。(ヘブル書 11 章 24 ~28 節)

ここに登場した中心人物たちは、唯一絶対の神様を信じ、そのみ言を絶対視して行動した人たちです。

イエス様に「主よ、わたしたちに父を示して下さい。そうして下さいれば、わたしたちは満足します」(ヨハネ福音書 14 章 8 節)と言ったピリポの信仰と比べると、その違いが分かります。

### ②イエス様の神様に対する信仰

そのピリポに対してイエス様は「わたしを見た者は、父を見たのである」(ヨハネ福音書 14 章 9 節)と答えられました。

このみ言から考えると、神様ご自身が、ヤコブやモーセなどの中心人物たちの信仰や行動を通して、当時のイスラエル民族にそのお姿を示されたということになります。

それでは、唯一絶対の父なる心情の神様は、どのような心情をもち、何を信じていらっしゃるのでしょうか？

墮落人間においても、その一人の子女でも不幸になれば、決して幸福になることができないのが、父母の心情である。まして、天の父母なる神が幸福になり給うことができようか。ペテロⅡ 三章9節を見れば、「ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられるのである」と記録されている。(『原理講論』p235)

このように、父なる神様は、私が神様を信じる前から、私が真の子女として戻って行くことを信じ、忍耐をもって待ち続けてくださっているということです。

イエス様は、大祭司カヤパから「あなたは神の子キリストなのか」(マタイ福音書 26 章 63 節)と尋ねられたとき、「あなたの言うとおりでである」(マタイ福音書 26 章 64 節)と答えられています。

この返答によって十字架の刑が確定するのですが、イエス様はどうしてそのように答えることができたのかについて、文鮮明先生は次のように語られています。

イエス様が、「私は神様の息子だ。私は神様を信じる」と語ることができたのは、自分が神様を父として信じているように、神様も自分を息子と思っていることを確信したからです。(『文鮮明先生御言選集』5-180 1959.1.18)

このようなイエス様の信仰から、どのような苦難にも屈せず、死をも越える信仰は、神様が私を信じてくださっていることを確信するところから始まると言えます。

## (2) 歴史的な一神教の信仰と「内的な試練」の克服

### ① 歴史的に継承されてきた一神教の信仰

本来、信仰とは、唯一絶対の神様と私との間に結ばれるものなので、次のみ言のように、信仰者にとって神様を知ることが、何にもまして優先されるべきことです。

心との関係がなくては、体の行動があり得ないように、神との関係がなくては創造本然の人間の行動もあり得ない。(中略)ゆえに、心を知らずには、その人格が分からないように、神を知らなくては、人生の根本意義を知ることができない。(『原理講論』p82)

人間が、根本的に、神を離れては生きられないようにつくられているとすれば、神に対する無知は、人生をどれだけ悲惨な道に追いやることになるであろうか。(『原理講論』p31)

そして、人類の復帰摂理歴史は、正しい神観をもつ信仰へと段階的に発展してきました。

モーセを中心とする旧約時代は「唯一絶対の神様」、イエス様を中心とする新約時代は「父なる神様」を信仰しました。

そして再臨主を迎えた成約時代は、旧約と新約の信仰を基台とした上で「心情の神様」が信仰の対象となっています。

これを個人の成長段階で考えてみると、神様が存在すると認識するのが旧約前の段階、その神様は複数いらっしゃるのではなく唯一の存在であることを信じるのが旧約段階です。

そして、神様は私の父であることを実感するのが新約段階、さらに心情の神様であることを体恤するのが成約段階になります。

神様が存在されること、神様はお一人であること、神様は私の父であられること、そして抑えることのできない愛の衝動をもつ心情の神様であられること、これが歴史的に継承されてきた一神教信仰の軸になるものです。

## ②唯一絶対の父なる心情の神様への信仰を狙うサタン

このような一神教信仰の軸は、人体で言えば背骨のようなもので、背骨がずれると全身の至るところに歪みが生じます。

サタンおよびその勢力は、気付かれないう、この信仰の軸を少しずつ微妙にずらそうとしてきます。

ですから、いつも祈りとみ言とその実践により、生活圏の中で神様の存在を身近に感じることができるよう努力する必要があります。

## ③アブラハムの象徴献祭の教訓

私たちの生活圏内に潜むサタンおよびその勢力が、どこをどのように攻めてくるのかを知るには、アブラハムの象徴献祭の失敗がよい教訓になります。

アブラハムが象徴献祭としてささげた鳩と羊と雌牛とは、果たして何を象徴したのだろうか。この三つの象徴的な供え物は、三段階の成長過程を通じて完成する宇宙を象徴するのである。すなわち、まずそのうち、鳩は蘇生を象徴したものである。(『原理講論』p319)

アブラハムは、この蘇生を象徴する鳩を裂かずに捧げた結果、次のようになってしまいました。

アブラハムが鳩を裂かずにささげたことは、サタンのものをそのままささげた結果となり、結局、それはサタンの所有物であることを、再び、確認してやったと同様の結果をもたらしてしまったのである。このように、蘇生を象徴する供え物である鳩がサタンの所有物として残るようになったので、蘇生の基台の上に立てられるべき長成と完成を象徴する羊と雌牛にも、やはりサタンが侵入したのである。(『原理講論』p323)

アブラハムが供えた祭物のうち、蘇生期の鳩にサタンが入ったため、長成期と完成期の祭物も、すべてサタンに奪われてしまいました。

このことから、サタンが侵入しようとして最初に狙ってくるのは、蘇生段階の信仰、すなわち唯一絶対の神様に対する私たちの信仰と言えます。

特に日本人は、多神教の信仰と価値観に囲まれた生活圏で暮らしていますし、民族的にも善悪二元論的な価値観に陥りやすい傾向があります。

例えば、天国と地獄を光と影のようにとらえ、天国があれば地獄もあるというような善悪と陽陰を混同してしまうところがあります。

本来、善と悪は同時に同じところに存在することはできませんが、陽と陰は同時に

同じところに存在し、一体化することができます。

このような違いがあるにもかかわらず、善悪と陽陰を混同すると、天地創造の前から悪が存在することになり、結果的に人間の墮落を否定することになるので、サタンは自分の正体と罪状を隠すことができます。

サタン勢力は、善悪二元論から多神教的な信仰へとずらしていきながら、自分たちが入り込む余地をつくらうとするので、唯一絶対の神様に対する信仰を守ることが、今、私たちが受けている「内的な試練」を克服する最初の一歩になります。

### 【編集後記】

本ブログ・記事のコンセプトは、「神様の創造理想世界を目指して一緒に歩みましょう」というものです。

今回の記事の内容についても、私自身が正しい神観や信仰観をもっているということではなく、現時点ではこれがあるべき姿と考えるので、これを一緒に目指しませんか、というところに趣旨があります。

今、まさに「内的な試練」に直面している状況を克服するのに一助となれば幸いです。

祈